



えぼとてつお／作家。1946年、東京都生まれ。東京大学経済学部卒業。三井銀行(当時)を1年で退職し、出版社に勤務。83年から作家活動を開始する。主に政治、経済周辺に題材をとった作品を精力的に発表している。著書に『集団左遷』『会社葬送―山一證券、最後の株主総会』『小説盛田昭夫学校』『くたばれ成果主義』『団塊世代の二万二千日』『ジャパンプライド』『起業の砦』『定年待合室』『霞が関にラブレター』『仕事が変わる『魔法の言葉』』等多数。PHOTO:岡村啓嗣

規制の虜

グループシンクが日本を滅ぼす

黒川清

Regulatory Capture
Will Japan Change?

講談社

規制の虜 グループシンクが日本を滅ぼす

黒川 清著
講談社刊
定価:本体1,700円+税

重大事故に結びついた日本の「同調圧力」

タイトルの「規制の虜」とは、「政府等の規制機関が規制される側の勢力に取り込まれ、支配されてしまう状況を指す経済用語」である。具体的には次のようなことだ。

「原子力安全・保安院は経済産業省の一機関なので、あまり厳しく規制をすると、上から何らかの圧力がかかる可能性もあったため、当初は色々と注文を付けても、最終的には東京電力の要望通りになる」(要旨)

本書は、東日本大震災の九カ月後に設置された「東京電力福島原子力発電所事故調査委員会(通称Ⅱ国会事故調)」の委員長となった、黒川清が描いた「ドキュメント」と「原因分析」の書である。調査の過程で、

日本の組織の病弊がくつきりと浮かび上がる。

事故に関して「国会」は、規制する側にも、される側にも属さない。その国会が設置した黒川の「事故調」は、事故の過程を厳しく点検する国民の側になる。そんな機関は権力者にとって目障りだから、これまで日本では設置されたことがなかった。

この時あたかも、民主党政権二番手の菅直人内閣の真っ只中。黒川が「国会事故調」の設置を提案した後、さまざまな紆余曲折はあったが、何とかスタートを切った。

選任された委員はほぼ全て民間人で、決して「規制の虜」にかからない人達である。彼らの基本姿勢は「フ

アクトの積み重ねから真実を見る」というものだった。

それを貫くべく「委員会は全てのメディア関係者にオープンにし」、報告書の文言を事故調内部で調整する時さえも、全委員にメールを送り、共同討論をするようにした。

ファクトを積み重ねるために多くの関係者にヒヤリングし、それを「ど」のメディアにも公開し、ウェブでも中継し、さらに同時通訳を付けて世界から見てもらった。検証のプロセスを透明にするため」である。

透明性の高い調査の場と呼ばれた、規制される側の最重要人物の一人、東京電力元会長・勝俣恒久の対応が、日本的病弊をはつきり示している。

「勝俣氏に関して」最も印象に残ったのは、当事者意識の欠如と責任回避の姿勢である。「安全に配慮してきたつもり」など、『だったつもり』という発言が多く、6回あった。また、『それは社長の……』という発言は10回を数えた(中略)ここま

でとほげるのはひどいと感じた」見事なまでの責任回避の姿勢だ。

一方、規制する側にいた人物も負けてはいない。

を昇りつめ、ヒヤリング当時は原子力安全・保安院長である。

黒川は彼をこう問い詰めた。

「あなたが保安院長としてやるべきなのは、政治判断ではありません。(安全のための)30項目をやら(実行しなければいけないと、なぜ、はっきり政治家に言わなかったのですか)すると深野は口ごもり、明確に答えることはできなかった。

こうした調査を通じ、結局、黒川らは何をしたのか? 調査統括官となった宇田左近の表現が面白い。

「我々は日本株式会社ガバナンスを全身CTスキャンしたようなものでしたね」

「CTスキャン」して見えてきたものを一言でいうと、「同調圧力」である。つまり「原子力ムラ」がつくり上げてきた価値観と、行動への同調圧力ということになる。その同調圧力に屈しなかった「国会事故調」の報告書は、国内ではほとんど無視されたが、海外で高い評価を得た。

よき目標に向けて一致団結するのは悪いことではないが、危険をはらむ目標に疑問を問いかけることさえできず、同調圧力に尻を叩かれるままに突き進むと、とんでもない悲劇を招くことになる。(文中敬称略)